

岩崎育夫著

『物語 シンガポールの歴史』

——エリート開発主義国家の二〇〇年——』

(中公新書 2208)

中央公論新社 二〇一三・三刊

B 40 二六二頁 八六〇円

シンガポール研究の第一人者である著者が本書の冒頭で述べているように、シンガポールが世界で注目されるのは、多くのアジア諸国において独立後に政治社会混乱や社会停滞が続く中で、マレーシアからの分離独立後、英語教育エリートを軸とした人民行動党の長期政権の下で政治が安定し、日本やアメリカなど先進国企業の国際加工基地として、また東南アジアの金融センターとして発展したためである。

本書は、シンガポールの支配者が誰であったかを軸に各時代の特徴を読み取っている。結論を先取りすると、シンガポールの指導者は、国土が小さく資源がない国で、世界とつながった経済こそが唯一の生存の道であると考え、開発関連機関を体系的に整備し、社会の有能な人材を開発官僚として確保し、先進国企業を必死に誘致し、これらの企業が活動しやすい環境整備に努め、更に政府自らも開発に参加し、官民一体の開発を進めたことが急速な発展と近代化を可能にした。

イギリスのアジア貿易の拠点として発展したシンガポールは、

華人などの移民集団を受け入れ、多民族社会となり、三年八月」と称される日本占領期を経て、住民の中でナショナルリズム意識が醸成された。シンガポールでは、イギリス的国家を志向する英語教育を受けたエリート集団と、社会主義の影響を受け中国的国家を志向し、労働者からの広い支持を集める華語教育を受けた集団が存在していた。全く異なった政治イデオロギーを持つ両者は、独立を目指す中で共闘し、人民行動党という政党を結成した。本書では、同党の中でリー・クアンユーが率いる英語教育エリートが主導権を握る過程と、分離独立に至るまでのマレーシアとの関係を詳述している。独立後の人民行動党による支配体制下での経済開発を、著者は「シンガポール株式会社」と表現し、社長であるリーの号令の下、社員全員が一丸となって会社の発展に励んだとしているが、これは政治・経済だけでなく、シンガポール社会全体を言い表していると言えよう。本書はリー・クアンユーという傑出した政治家を中心軸として置いており、リー体制下でのシンガポールを知る上で格好の概説書と言える。

ただし、概説書であるが故に、リー・クアンユー体制に対する新たな論点が提示されていないのが少々残念である。本書終盤で、著者はポスト・リー体制について、基本的にはリー時代の政策を継承しつつあるが、野党の台頭など政治的な変化や中国の台頭に対応するための新たな経済政策が行なわれつつあるとしている。シンガポールという国家が成立し、経済成長を遂げた後に生まれ育った世代が、強権主義と言えるリーの築き上げた政治・経済・社会体制をどのように評価し、また変えようとしていくのか、今

後の研究の成果を待ちたい。

(東條哲郎)